

施行しえた 20 例を対象とした。さらに、昭和 55 年から昭和 58 年の 4 年間に当科を受診し、発症 8 週間以内に肝シンチを施行し得た急性肝炎 44 例も対象とした。

〔方法〕 これら 64 例の肝シンチ正面像において、脾腫、骨髄描出、肺の描出および ALI (肝の大きさの指標として肝の面積を体の横径の 2 乗で割ったもの) の 4 項目について検討した。

〔成績〕 1) 数量化理論第 II 類を用い、脾腫、骨髄描出、肺の描出、ALI にスコアをつけることにより、対象とした 64 例の肝シンチにおいて診断率 92.2% で重症肝炎と急性肝炎を判別し得た。2) 肝シンチにおいて重症肝炎と急性肝炎を判別する重要な所見は、骨髄描出および肝の萎縮度であった。3) 重症肝炎において、骨髄描出で肋骨まで描出した例が死亡例 5 例中 3 例に存在したが、生存例 15 例では 1 例も存在しなかった。また、肺の描出についても同様で死亡例 5 例中 3 例に存在したが、生存例 15 例では 1 例も存在しなかった。

〔結論〕 肝シンチグラフィーにおいて、脾腫、骨髄描出、肺の描出、肝の大きさを指標にして急性肝炎と急性重症肝炎の判別が可能であった。さらに、急性重症肝炎の予後もある程度予知可能であると思われる。

41. Gastroscintigram による抗コリン剤の胃排出機能の評価

谷口 勝俊 大嶋 研三 植阪 和修
小西 隆蔵 尾野 光市 田伏 洋治
山本 達夫 河野 暢之 勝見 正治

(和歌山県立医大・消外)

われわれは胃排出機能検査として Gastroscintigram の有用性について発表してきた (日消誌, 74: 1699, 1977, 日消誌, 77: 1871, 1980)。今回、本法により、抗コリン剤の胃排出に及ぼす影響を検討した。対象は健常者が 5 名、胃潰瘍患者が 10 名、十二指腸潰瘍者が 4 名、胃・十二指腸共同潰瘍が 3 名であった。方法は被検者が ^{99m}Tc sulfur colloid 0.5 mCi 混入した全粥を摂取後、座位で胃部を LFOV Gamma Camera (Scintiview) と ultra high resolution Collimator でとらえ、microcomputer に収録し、その後、画像を再生し、胃の ROI から 1/2 胃排出時間 (T 1/2) と 90 分の胃排出率を求めた。抗コリン剤は Butropium bromide (Coliopan®) 10 mg を用い、本剤の非投与と投与下の胃排出を消化性潰瘍患者と比較した。その結果; T 1/2 の平均は健常者で 49 分で、

胃潰瘍で 52 分より、本剤投与により 55 分に、十二指腸潰瘍で 60 分より 50 分に、共存潰瘍で 62 分より 52 分になった。また、本剤の投与により、T 1/2 が 52 分より速い症例は胃排出は抑制され、遅い症例は促進された。また、90 分胃排出率は健常者が 72%、胃潰瘍が 69% から本剤投与により 61% に、十二指腸潰瘍が 70% から 73% に、共存潰瘍が 60% より 78% になった。90 分胃排出率は 76% より低い症例が胃排出が促進され、逆に高い症例は抑制された。抗コリン剤は消化管平滑筋運動を抑制し、胃排出を遅らせるとされているが、本剤は胃排出の遅いものを速く、速いものを遅くして、正常の胃排出に control する作用があることがわかった。

以上、Gastroscintigram は薬剤の胃排出に及ぼす効果判定にもきわめて有用な方法である。

42. Gastroscintigram による食道離断術後の胃排出

河野 暢之 遠藤 悟 岡 統三
福永 裕充 山本 誠己 谷口 勝俊
勝見 正治 (和歌山県立医大・消外)

食道静脈瘤に対する食道離断術は、広く施行されているが、迷走神経が切離されるため一般的に幽門形成術 (以下幽成) が付加される。Gastroscintigram を用いて食道離断術後の胃排出動態を観察し幽成の必要性を調べた。

対象は特発性門脈圧亢進症 4 例、肝硬変症 10 例の計 14 例で、いずれも食道離断術、血行郭清術、脾摘術、胃瘻造設兼胃腹壁固定術が施行され、幽成群 5 例、非幽成群 9 例である。

胃排出時間は ^{99m}Tc sulfur colloid を混入した試験食を用い、LFOV scintillation camera, ultra high resolution collimator により測定、micro computer に収録し、胃内容が半量になるまでの時間 T 1/2 でもって胃排出時間とした。術後経月的に胃排出時間を測定すると幽成群では健康成人より早く、非幽成群は健康成人に近い例が多かったがばらつきがみられた。しかし、いずれの非幽成群も経月的に胃排出時間は短くなる傾向にあった。胃全体、胃底部に関心領域をおいても、術後 1 か月、3 か月、6 か月と胃排出状態の早い排出カーブを得た。特に食後早期に強い排出があり、後期には比較的ゆるやかな排出であった。分時排出率をみれば、両群とも前期の排出率は早く後期はおそくなり、3 か月以後同じパタ